フランスにおける悪魔憑きについて：
悪魔学と 16 世紀フランスの妖術裁判を手掛かりに

菊地英里香

はじめに

「悪魔憑きは、全ての国と全ての時代で等しく信じられた。キリスト教もためらいなく、それに重要な場所を与えた」[1]とフランスの中世史家ミュリエル・ラアリーは述べる。悪魔憑き現象がキリスト教の歴史を通して続いた理由の 1 つには、聖書に確かな基礎をもっていたことが挙げられる。ブライアン・P・ルヴァックによれば、『新約聖書』においてキリストとその使徒たちが悪霊を追い払ったという記述は 50 箇所ほどあるという[2]。これらの記述は悪霊が人間の体に入って取り憑くこと、同様にこれらの侵入した悪霊が人間の体から追い出されるということについてのキリスト教の考えを支えた。その一方で、中世の神学者たちは、非物質的な霊であると信じられていた悪霊たちがどのように人間の体に入り込んで占拠するかに関して、合理的かつ哲学的な説明を与えた[3]。中世と近世の神学者たちによれば、悪魔憑きは２つの方法で起こる。１つめは神の許しの下で悪魔が直接侵入する方法であり、2 つめは魔女（妖術師）の妖術により悪魔が犠牲者の体に送り込まれる方法である。本稿で扱う悪魔憑きは後者の方である。魔女たちは自らの意志で悪魔と結びついた者たちであるが、彼女たちの身体の中に悪魔がいるわけではない。これに対して、身体の中に悪魔に入り込まれた悪魔憑きたちは犠牲者であり、悪魔憑き状態での悪しき振る舞いには責任を問われることない。魔女と悪魔憑きの区別はこのように明白なものであった[4]。

本稿では、まず中世末期の悪魔学の書物である『魔女たちへの鉄鎚』において悪魔憑きがどのように神学的に説明されていたかを確認する。次に、16 世紀の悪魔学における悪魔憑きに関する言説を取り上げる。最後に、悪魔憑きが発端となった妖術裁判の記録を手掛かりに、悪魔憑きと関わるいくつかの問題点を検討し、悪魔憑きと妖術をめぐる当事者たちの心性について考えてみたい。

１．悪魔憑きについての言説

1.1.『魔女たちへの鉄鎚』（1486）

「しかし、魔女たちの求めに応じて悪霊たちは完全に人間に取り憑くことができるか疑問に思う者がいるかもしれない、魔女なしで取り憑く方法にさえ、疑問を抱くかもしれない」[5]と『鉄鎚』の著者たちは懸念する。これらの疑問を払拭するために、彼らは３つのことがらを検討する。第１に、悪霊が取り憑く様々な方法について。第２に、魔女の求めと神の許しの下で、悪霊たちはこれらの方法を使ってどのようにしばしば人間に取り憑くのか。第３に、これらの問題の実例である。

まず、第１のことがらに関してだが、大罪を犯している人間に悪霊が宿る一般的な方法は除外される。トマス・アクィナスは、大罪を犯した人間には常に、悪しき天使、すなわち悪魔が実質的に宿っているのかと問うている（*Quodlibet* III. q.3. a. 3.）。この疑問の原因には、恩寵の状態にあっては、常に聖霊が宿っているということがある（「コリントの信徒への手紙一」3:16）。この箇所で、トマスは人間のうちに宿るということは二様に理解されうると明言している。すなわち、魂に関してか、肉体に関してかである。精神のうちに宿ることができるのは神のみであるから、悪霊が魂の内に宿るのは不可能な上に、聖霊が自らによって魂の中に恩寵を引き起こすように、悪霊がそれ自身によって罪の原因となることはできない。肉体に関しては、悪霊は人間の２つの状況、すなわち恩寵の下にあるか罪のうちにあるかに応じて、２つの方法で人間の中に宿ることができるとされる。いかなる死すべき罪のうちにある者については、悪魔への隷属に身をゆだねていると言わねばならない。悪魔は外的感覚あるいは想像力に罪のきっかけを与えているときには、舟がかじ取りなしで海上にあるように、人をあらゆる誘惑の方向に動かす。このとき、悪魔が人間の心の中に宿っていると言われる。だが、悪魔憑きに見られるように、悪魔は本質的に人間に宿ることもできるとされる。しかし、後で見るように、これは罪というよりむしろ罰に属する。肉体的な罰は常に罪に付随して生じるわけではなく、ある時には罪人、またある時には罪人でない者にふりかかる。このようなわけで、神の人

知を超えた正義の深遠さに従い、ときに恩寵の状態にある者、ときに恩寵の外にある者のうちに悪魔は宿る。この形態の悪魔憑きは自分たちの探求の管轄外だが、ここで想起されたのは、神の許しの下で魔女の求めにより悪魔によって人間が本質的に取り憑かれることが不可能だと誰も判断しないようにするためだと『鉄鎚』は記す[6]。

次に、悪霊が人間を害し取り憑く方法に検討を加える前に、大前提として、そのようなことをなぜ神が許しているのかが論じられる。理由は５つあるとされる。①自らのより大きな功徳のため。②他人の小さな罪のため。③自らのささいな罪のため。④他人の大きな罪のため。⑤自らの大きな罪のため。これらの理由があるのだから、魔女の求めに応じ悪魔がこのようなことをするのを神が許しているということを疑ってはならないとされる。

①功徳のため。聖マルティヌスの愛弟子スルピキウス・セウェルス（360 頃－420～25 頃） の『対話』においてみられる。悪霊を追い払う力を恵まれたある敬神の神父は、言葉のみならず書きつけたものや苦行衣によっても悪霊を追い払っていた。この神父は世界中でたいそう有名になったので、自らが虚栄心という誘惑にさらされているのではないかと感じた。勇敢にこれに抗ったのではあるが、よりいっそう謙虚になるため、彼は５か月のあいだ自分に悪魔が取り憑くことを許してほしいと心から神に祈り、その通りに叶えられた。悪魔に取り憑かれるや否や、彼は繋がれなければならず、一般に悪魔憑きに適用されていた扱いが彼にもなされた。５か月目の終わりに、彼はすべての虚栄と悪魔から解放された。

②他人の小さな罪によって起きる悪魔憑きについては、グレゴリウス１世（540 頃－604）の『対話』（III-29）の聖エルテリウス（590 頃没、イタリア中部の都市スポレートの聖マルコ修道院の修道院長、その涙で死者を蘇生させたともグレゴリウスは記す）の事例が挙げられる。彼はある女子修道院に身を寄せた際、そこで悪魔に苦しめられている小さな子供と一晩過ごした。すると、その晩子供は悪魔から解放された。子供はこの聖人の修道院に置かれることになった。何日も経った後、修道院長は少年が解放されたことを少し喜び過ぎたあまり同僚たちに言い始めた。「悪魔は修道女たちに悪ふざけをしていたのだ。しかし、その子供が神の僕たちのもとに連れてこられたので、悪霊は彼を苦し

めるのをやめたのだ」と。すると、まさにその時、悪霊は再びその子供を苦しめ始めた。この聖人と同僚たちの涙と断食により、同日やっとのことで子供を悪霊から解放することができた。この例では聖エルテリウスの虚栄心が小さな罪ととらえられている。そして、他人の小さな罪のせいで無実の者が悪魔憑きになりうるなら、魔女の求めにより、小さな個人的な罪や他人の大きな罪、あるいは個人的な大きな罪のせいで悪魔憑きになる者たちがいても驚くべきではないとされる。

③個人的な小さな罪で悪魔憑きになることがあり得る。これはヨハネス・カッシアヌス（360 頃－430 頃）の『霊的談話集』(「セレヌス師の第一の談話」VII-27) においてみられる。モーセは敬神な生活を送る優れた隠者であった。だが、ある日マカリオスとの論争の際、自説を擁護するために少し行き過ぎたところがあった。するとたちまち彼はひどい悪霊に引き渡され、悪霊は彼に自分の排せつ物を食べるように強いた。この罰は一時的な過ちの汚れが残らないようにするために、清めのために彼に主より送られたものだと思われる。実際、それは彼の奇跡的な治癒に見られる。というのも、マカリオスの絶え間ない謙虚な祈りによって、悪しき霊はすぐさま追い払われ、彼から遠ざけられたからだ。

④他人の大きな罪のため、誰かが悪魔憑きになることがある。グレゴリウスの『対話』（I-10）において、フォルトゥナトゥス司教（537 没）は、ある悪魔憑きから悪魔を追い払った。同じ晩、この悪魔は巡礼者の姿をして街のあちこちを通って叫び声をあげた。「フォルトゥナトゥス司教が巡礼者である自分を宿から追い出したので、休む場所を見つけることができない」と悪魔は言った。その時、妻と息子とともに座っていた男が、彼を自分の家に招いた。彼は追放された訳を尋ね、巡礼者の作り話に基づいて司教を馬鹿にして喜んだ。そのとき悪魔は子供に取り憑き、彼を火の中に投じ、その命を奪った。

⑤個人的な大きな罪のため。この例は聖書と聖人の受難の中に多く見られるとされる。サウルは神への不服従のために悪魔憑きになった(「サムエル記 上」1：16)。

このように神の許しが与えられた例を挙げたうえで、「さて我々は人間が自分たちの罪のために、同様に魔女たちの要求によって悪魔憑きになることがあると何人にも不可能に思われないように以上のことを述べてきた。今や我々は

もっと最近のできごとにあたりながら、悪魔憑きの様々な方法について理解できる状態にある」[7]とし、インスティトーリスは、自らが出会った悪魔憑きについて述べる。

教皇ピウス２世（在位 1458－64）の時代、インスティトーリスがまだ異端審問官の職務に就く以前の話である。あるボヘミア人が、世俗の司祭である自分の一人息子を悪霊から解放するためにローマまで連れてきていた。彼はある女（魔女）と教区の規則について口論となり、その女に悪魔を送り込まれたのだった。インスティトーリスは、彼を何人かの聖人の聖地に連れていくことにした。これらの場所に到着すると、悪魔祓いのあいだ、彼は恐ろしい叫び声をあげた。出ていきたいと言ったかと思えば、そのすぐあとでまったくそうしたくはないと言った。悪魔祓いのときを除いて彼の振る舞いは品の良い司祭のもののままで、いかなる奇抜さもなかった。ある日ある教会を通ったとき、彼は栄えある聖処女にあいさつするためにひざまずいた。そのとき、悪魔は彼の口から舌を長く飛び出させた。インスティトーリスが彼にそれを妨げることはできないのかと尋ねると、「まったくできません。なぜならば、悪霊は自分の四肢と器官、首、舌、肺を意のままにし、好きなときに話したり叫んだりするからです。おそらく私は自ら、私の器官によって発せられた言葉を聞いています。しかし、抗うことはまったくできないのです。より熱心に何かの祈りに打ち込もうとするとき、それはより乱暴に私を襲い、より激しく舌を出すのです」[8]と彼は答えた。最終的に、彼を哀れに思ったとある尊い司教が、四旬節のあいだパンと水で断食し、熱心に祈り悪魔祓いを行うことにより、この悪魔憑きの司祭を悪霊から解放したのだった。

このように、インスティトーリスは自らの体験を語った後で、悪魔憑きがどのように起こるかという問題に移る。「奇跡でもなければ、一生のうちにどのように、どれほどの手段を用いて悪霊が人間を傷つけたり人間に取り憑いたりすることができるか十分に説明できる者は間違いなく誰もいないだろう」[9]と、この問題の難しさを認めながらも、5 つの方法によるとする。①体の中でだけ害される。②体の中と内的能力において害される。③内的能力のみ害される（別の箇所[10]では３つめの方法は、内的および外的誘惑による、となっている）。④一時的に理性の使用がはく奪される。⑤理性のない動物に変えられてしまう。

インスティトーリスがローマで出会った悪魔憑きは、④にあてはまるとされる。彼は普段はおとなしかったが、ときおり理性を失っていた。

悪霊は体の中に侵入することはできるが、魂の中に入ることはできないとされる。なぜなら、それができるのは神だけだからだ。また、悪霊が体の中に侵入することができるというとき、それは体の本質の内部に入ることができることを意味してはいないと著者は言い、以下のように説明する。しばしば悪霊たちはある方法で本質的に人間の体に住み着き、一時的に理性の使用をはく奪することができる。身体の境界には量の境界と本質の境界の２種類があり、善い天使あるいは悪い天使が体の身体的な境界に内部で作用を及ぼすとき、それは身体的な能力に影響を及ぼす方法で入ってくるとされる。こうして、善い天使は善人のもとに想像の幻をもたらす。しかし、それらが身体の本質に入り込むと言われることは決してない。なぜなら、それは不可能なことであり、体の一部分としても、エネルギーとしても不可能だ。体の一部分としても不可能というのは、天使の本質と人間の本質とはそれぞれまったく異なるものだからである。神のみが本質の作用と保存に影響を与え、望むだけ長くそれを慈悲のうちに保つことができる[11]。

先ほどの司祭の場合、以下のように３つの方法で悪霊は彼の体に取り憑いた。第１に、身体的境界の内側で体に入り、ある種の本質的な占拠によって頭を占領した。第２に、理性の使用を失わせることで知性を暗くし、魂に対して外側から影響を及ぼした。第３に、彼は言葉の使用の自由を完全に奪われていたものの、意味は分からずとも常に自分の言葉を意識していた。

『鉄槌』において、なぜ神が悪魔に人間に取り憑くことを許しているのかという理由については、ある程度の説得力をもって説明がなされていた。その一方で、悪魔が人間を傷つけ取り憑く方法については、体の中だけで害される場合と内的能力だけで害される場合の説明もなく、釈然としない。インスティトーリスにとって自明であるから書かなかった可能性もあるが、この問題が難しいと認めていることから、５つに分類してみたものの、著者の中でも未整理であいまいな点が残っていたためこのような記述になったものと推察される。３番目の記述の不一致も、そこに起因しているのかもしれない。

1.2　16 世紀の悪魔学者たちの言説

「悪魔に取り憑かれた人々がいるかどうかということを、私はまったく議論しない」[12]とジャン・ボダン（1529/30－1596）は言う。その理由は、聖書と人間たちのすべての物語は、それでいっぱいだからであるとされる。フランスに悪魔憑きはあまりいないと彼は述べるが、それでもいくつかの事例について語っている。彼の住むランの近くのワントレという村の、サミュエルという 12、13 歳の少年はランドの城主の息子であったが、母親の死んだ 1 か月後、霊にとらわれた。それは彼に強く働きかけ平手打ちをした。彼を救うには力ずくで引き離すしかなかった。父親は自分の宗教のために悪魔祓いを望まなかった。ボダンは、「その後彼が解放されたか私は知らない」[13]と述べている。12、3 年前に、ヴェルヴァンの女が悪霊に取り憑かれ、ランの町で悪魔祓いされた。イタリアやスペインには多くの悪魔憑きがおり、彼らはギリシア語、ラテン語、その他の学んだことのない言語を話すが、ヴェルヴァンの霊も女が舌を喉まで引っ込めているときに流ちょうに話したという。ヒッポクラテスは『聖なる病』の中で、これを癲癇に過ぎないと考えていた。だが、癲癇もちにおいてこれらはまったく見られない上に、いくつかの症状がまったく異なっているとボダンは言う。そして、証拠を欲しがる者たちのために、彼は妖術師たちを尋問したとも述べる。彼らは悪魔に出ていくよう患者の耳元で命じた。すると悪魔憑きは気を失ったように倒れた。少し経つと彼は目を覚まし、遠くで起きた本当のできごと、知らないことについて語った。そのあとで、悪魔から解放された。癲癇ではこのようなことはまったく起こらないと彼は言う[14]。

ある人間が他人の体の中に悪霊を送り込む力をもっているか決めるのは簡単なことではなく、可能でないと考える者たちもいるが、完全なる真実は、神の許しがあれば可能だということだとアンリ・ボゲ（1550 頃－1619）は述べる[15]。その根拠とされるのは、聖パウロがコリントの姦通者たち（「コリントの信徒への手紙一」5：5）と、異端者のヒメナイとアレクサンドロをサタンに引き渡したという箇所である（「テモテへの手紙一」1：20）。また、「詩篇」第 78 章第 49 節の「燃える怒りと憤りを激しい怒りと苦しみを災いの使いとして彼らの中に送られた」という一説も引用されている。16 世紀のフランチェスコ会の神学者

ジャン・ベネディクティと『悪魔憑きについて』(1594) の著者でイエズス会の神学者ペーター・テュラエウス（1546－1601）もこの意見を立証しているとボゲは言う。

ボゲは『妖術師論』の冒頭で、ある魔女の呪いのせいで悪魔に取り憑かれた少女について記している[16]。1598 年 6 月 5 日（土)、クロード・マイヤとアンベルト・コワリエールの娘でペルシュに住む 8 歳のロワズは四肢の自由が利かなくなり、はってしか進めなくなった。また、大変奇妙に口がねじ曲がったままだった。このように幾日も苦しめられている娘の様子から悪魔に取り憑かれていると判断した両親は、悪魔祓いのために彼女を教会へ連れて行った。誰が呪いをかけたのか司祭が尋ねたとき、フランソワーズ・スクルタンだと彼女は答えた。その日、悪魔は彼女から出ていかなかった。6 月 4 日の遅くに、フランソワーズ・スクルタンはロワズ・マイヤの両親の家にやってきて、一晩泊めてほしいと言った。夫が不在だったため、アンベルトは断った。しかし、結局フランソワーズのしつこさに負けた。彼女が家の中に通され、アンベルトが家畜の世話に行ったとき、フランソワーズは火のそばで暖をとっていたロワズと妹２人に近づき、ロワズに糞に似たパンの皮を与えて食べさせた。そして、このことを言うなと厳しく命令し、さもなければ彼女を殺して食うと言った。次の日、少女が悪魔に取り憑かれていると判明した。彼女の母はフランソワーズに宿の要求を断ったことを証言し、両親はともに娘の病気の証拠をあげ、これは少女によって確認された。彼女は大変幼かったが、証言に揺らぎはなく 13、4 歳かと思われたほどだった。裁判官は何が起きたかをすっかり確信し、フランソワーズ・スクルタンを捕まえて投獄した。

ボゲは古今の悪魔憑きの事例を列挙した後で、「このような例を長々とあげることが何の役に立つだろう。毎日、我々自身の町において、我々は頻繁に多くの悪魔憑きと出会い、彼らの悪魔憑きはあるワルド派や妖術師のせいだとされている」[17]と述べている。

医師のヨハン・ヴァイアー（1515－1588）も悪魔が人間に取り憑くことがあると認めている。ヴァイアーによれば、以下のような方法で悪魔は人間の身体に危害を加える。

「神の許しがあれば、悪魔はしばしば奇妙で超自然的な様々な方法で身体に襲いかかる。犠牲者は人間か家畜であるが、魔術によって苦しんでいると言われる。悪魔はそれらの体の中に入るか、入らずに通常の体液をかき混ぜたり汚したりし、あるいは害のある体液を主要な体の部分に運び込み、これらの部分の静脈や自然の導管をふさぐ。あるいは器官の構造を狂わせ、脳の精気を混乱させ種々の形を吹き込む。そして、しばしば彼らを興奮させるので、これらの人々においては正常な人々よりも生命力が力強く現われる。あるいは他に毒のあるものや内側あるいは外側の蒸気、この種の他のものにより体を汚し、腐らせる。その結果、無数の奇妙で深刻な病気が生じる。やがて、人間の本質と力と機能は、精緻で巧妙な敵の魔術から自由ではいられない。私たちは日の光よりも明らかな例をヨブにおいてみる。ヨブは悪魔の努力により、まず 50 頭の牛を失い、500 頭のロバを失い、彼の召使たちは倒れた[18]。」

あるときヴァイアーは、16 歳くらいの悪魔憑きの少女を診察した。彼女の父とその付き人は彼女の様子を見て、吐きそうなのがわかった。彼女の口を注意深く熱心に見つめていると、黒い大きな布のかたまりが舌の下にあるのに気づいたので、ヴァイアーはそれを指で引っ張り出そうと試みた。こうすることで、これらのものが胃の中に隠されていたのではないということを完全に証明したかったからだ。彼女の父は彼に、彼女がしばしばいろいろなものを吐き出したと言い、証拠として黒いぼろきれや針やピンなどを見せてきたのだった。ヴァイアーが取りだした布はほとんど濡れていなかった。もし、それが胃の中から出てきたのなら、彼女は 3 時間前に食事をとったので、胃の中の未消化の食物や胃液が付着していないのはおかしいと彼は考えた。だが、サタンはこれが胃の中から出てきたと信じ込ませるために、布が彼女の口から取り除かれたときに「苦い」と彼女の声ではない子供じみた声を出させたのだという[19]。

ヴァイアーがこの娘が治るのを確信したとき、彼女は先ほどの幼い娘の声で、「ずる賢すぎるおまえとは関わりたくない」と言った。そして、さらに「なんと彼は嘘つきの目をしていることか」と付け加えた。そのとき彼女に苦痛をもたらした者を誰も知らないのかと尋ねると、彼女は同じく子供じみた声で、そのとき妖術の罪で告発され投獄されていた、ある（ヴァイアーの判断では、ま

じめな）女性がこの苦痛をもたらしたのだと答えた。だが、この女性はそのあと解放され、母親と他の 2 人の女性とともに家に帰された。彼女たちは妖術のかどで誤って告発され、まるまる 1 か月のあいだ投獄されていたのだった。ヴァイアーは、この少女の悪魔憑きは不可知の神慮により自然の原因で生じたにもかかわらず、不当に魔女のせいにされたと述べている[20]。

詳細は不明であるが、この少女に名指しされた魔女の嫌疑をかけられていた女性は難を逃れることができたが、次に取り上げる悪魔憑きの少年に告発された人々は、彼女とは別の道をたどることになる。

２．カロワ・ド・マルルの妖術裁判

2.1 主な登場人物と事件の概要

一連の訴訟は、ベリー地方のサン・ボージュ城主支配領（ブールジュとサンセールのあいだに位置する）において、アンリ 3 世の治下の 1582 年 12 月 21 日から 1583 年 3 月 30 日まで行われた[21]。総勢 160 人ほどの人物がこの裁判に関わり、判決により 5 人の男が処刑された。彼らに加えて、1 人の老女も有罪判決を受けたが、彼女は獄中死していたため、その死体が公然侮辱の刑に処された。まず、その 6 人と悪魔憑きの少年ベルナールについて簡単に紹介しておく。

マラン・スムレ：ブドウ園の労働者、25 歳くらい。ラ・ブロス村在住。ギユメット・ピロンとエティエンヌ・スムレの息子。エティエンヌ・ジロとジョアシャン・ジロによって、２年前にサバトで見たと告発された。悪魔に身を捧げ、サバトに 2 回運ばれたと自供した。サバトでは母親と性交し、悪魔にしるしをつけられたとも自白した。粉屋のロンブル・リモザンに呪いをかけて病気にさせ、その後ガチョウに呪いを移して治したとされる。妖術師だとうわさされており、多くの人々から告発された。2 度脱獄を企てるも、失敗。

エティエンヌ・ジロ：耕作人、35 歳。サンス教区在住。父と同じくゴテというあだ名でも呼ばれる。ベルナール・ジロのいとこ。ベルナールの口を通して悪魔から悪魔憑きの主犯だと言われた。タブルデの証言によれば、悪魔に対して

自分の前妻 2 人および借金のあったグレッサン父子を殺害したとサバトで報告していた。

ジョアシャン・ジロ：雑役夫、40 歳くらい。ル・ボッス・ド・ラ・ブロッスとも呼ばれる。（猫背 bossu でラ・ブロッスに住んでいたため。）ムネスト・ラステル教区在住。タブルデにサバトで見たと告発されて投獄された。ギユメット・ピロンを何度か殴りつけたことがあり、彼女に敵呼ばわりされていた。けんかの際に、互いに魔女、妖術師とののしりあった。2 回サバトに行ったと供述した。かねてより妖術師だとのうわさがあり、これはエティエンヌ・ジロ、フランソワ・リモザンによって証言された。また、ロンブル・ジロは彼がギユメット・ピロンとマラン・スムレと共謀して自分の双子のうちの 1 人と牛を殺したと考えていた。他の多くの村人からも告発があった。

ジュアン・タブルデ：サンス城主支配領の役士、53 歳くらい。屋根ふき職人、織工。デ・ベルティーユとも呼ばれる。土地の役士のクルウェによれば、彼には大妖術師だという評判が常にあり、何人も衰弱死させ、家畜も殺害した。エティエンヌ・ジロは、タブルデに妖術師たちの仲間になるようしつこく迫られ、ついに誘惑に負けて神を棄てたと供述した。ジロはまた、ベルナールに悪霊を送り込んだのはタブルデであり、それを取り除くことができるのは彼だとも述べた。タブルデ自身はベルナールの継父であるシャルル・シャバンと何のいさかいもなかったと言っているが、うわさからシャルル・シャバンの息子のうちの 1 人を衰弱死させたのは彼だとエティエンヌ・ジロは考えていた。タブルデは何人もの村人たちに妖術の罪を告発された。ついには悪魔との出会いやサバトについて自供したが、シャルル・シャバンの息子はもとより、他の誰も殺したことはないと主張した。悪魔からもらった粉は自分山羊２匹を殺すためだけに使ったと述べた。パリ高等法院に控訴し出頭したが、棄却された。処刑の際、サバトへの参加と山羊殺害は認めたが、それ以外に悪いことはしていないと主張した。

ジュアン・カウェ：ワズィの耕作人、50 歳くらい。エティエンヌ・ジロにより、

サバトで見たと告発され、妖術師として投獄された。共有のまぐさをめぐって、エティエンヌ・ジロとけんかになったことがあった。妖術師であること、サバトに行ったことを一貫して否認し続けた。多くの村人が彼に呪いをかけられたと告発したが、すべて認めなかった。密猟や狼使いの嫌疑もかけられていた。彼の息子や娘たちが妖術師だというううわさもあった。パリ高等法院に控訴したが、棄却されて死刑に処された。最期に及んでも罪を認めることはなかった。

ギユメット・ピロン：エティエンヌ・スムレの寡婦。57 歳くらい。ムネスト・ラステル教区在住。魔女だといううわさがあった。エティエンヌ・ジロとベルナール・ジロが彼女をサバトで見たと証言。ジョアシャン・ジロとは異父姉弟だが不仲。獄中で首つり自殺。その後死体は市中引き回しにされてから半ば焼かれ、絞首刑にされた。

ベルナール・ジロ：12、13 歳。シャルル・シャバンとカトリーヌ・ペロッタンの息子。実の父ムルショワール・ジロは亡くなっており、シャルル・シャバンは継父。サンスとサン・ジェームズで悪魔祓いを受け、絶えず悪魔憑き状態におちいった。被告人たちやバイイから祈祷を受けたが、効果はなかった。ベルナールは、いとこのエティエンヌ・ジロとタブルデが自分に小さな生き物を送り込みサバトに連れて行ったと述べ、彼らを告発した。サバトではギユメット・ピロンも目撃したと主張した。マラン・スムレ、ジョアシャン・ジロ、カウェらを妖術師として次々に告発した。

この裁判は、ベルナール・ジロという 12、13 歳の少年の悪魔憑きと深く結びついている。悪魔憑きの少年の言動を手掛かりにいくつかの問題点を検討する前に、ベルナールが悪魔憑きになり、エティエンヌ・ジロとジュアン・タブルデの 2 人を告発するまでの経緯と彼に対する悪魔祓いに関する裁判記録を見ておく[22]。

【１】新たな勅令に従って数えて[23]1582 年 12 月 21 日、法学士であるボージュとサンスのバイイであるピエール・ラギュは、当該のボージュより２リュー

〔約 8ｋｍ〕ほど離れたラ・シャプロットの町にいたところ、当該城主支配領に悪魔に取り憑かれた 12、13 歳の少年がいると知らされた。当該の悪霊たちはエティエンヌ・ジロの仕業によって送り込まれたといううわさだった。エティエンヌ・ジロは当該の領主支配領のサンス教区の住人であり、妖術師の疑いをかけられていた。

【２】そのため、我々はサンス教区のボージュ・ル・ヌフ小城塞へと赴いた。午後２時頃にそこに到着すると、多くの人々が小城塞の前に待ち受けていた。彼らは我々に、「悪魔憑きの少年ベルナール・ジロを見にここに来た」と言った。ベルナールはムルショル・ジロとカトリーヌ・ペロッタンの息子である。ムルショル・ジロが亡くなった後、母親はシャルル・シャバンと再婚していた。ベルナールは悪霊に取り憑かれ、激しく責め苛まれていた。人々によると、件のエティエンヌ・ジロとデ・ベルティーユと呼ばれるジュアン・タブルデが少年に悪霊を送り込んだとのことで、彼らに処罰が願われていた。

【３】人々は「件の者たちが逃亡するのを恐れて彼らを捕まえて小城塞の中に連れてきた。件のベルナール・ジロは 4 回もサン・ジェームズの教会に来たときにサンセールの司教代理の前に連れていかれたが、彼が祈祷すると、件の悪霊たちは少年の体の中で≪自分を送り込んだのは件のエティエンヌ・ジロとタブルデであり、彼らの許しなしに出ていくことはできない≫と言った」と述べた。これらの大勢の人々に、我々は特使であり裁きをするためにやって来たと宣言し、退散するよう命じた。

【５】城主の代訴人、我々の書記フランソワ・リッセも我々とともにいたが、我々は入ると、後者のタブルデが件のベルナールを苦しめている悪霊たちに、「悪魔の名の下にベルナールの体から出て行け」と命じているのを目にした。我々は、祈祷すべきは神の名の下においてでありその聖なる名によって語るべきだとして彼をだまらせた。そして、「生きている神の名の下に、彼を苦しめている悪霊たちに対し、出ていくように、彼が神を讃えられるように彼を休息のうちにととどめるように、彼に恵みがあるように」とこの子供に言葉をかけた。

【６】当該の命令がなされると、件の子供はひどくおぞましい様で目をひっくり返し、口をねじりはじめ、10 歳か 12 歳くらいにしか見えないほど小さかったにもかかわらず、件のコワヤールとラ・リブルドに制止されえず、ぞっと

するような動作をしながら、高く身を起こし、喉の中から甲高い声で「出ていくものか、何を命じても無駄だ」と叫んだ。件の者たちはやっとのことで彼を抑えているというありさまだった。そして少しあとで、件の苦しみと悶えからすっかり解放されたように見えた少年は、我々にこれらの言葉を言った。「ああ、やっと治った。エティエンヌ・ジロとジュアン・デ・ベルティーユ〔タブルデ〕がまた送り込んでこなければ、悪魔はもう自分の中にはいない」。

【９】少年が落ち着くのを待って、どのくらい前から件の悪霊たちに取り憑かれたか、いつどのようにそれが彼に起きたのか我々は尋ねた。そのために彼に書記を付け、誓約をとった。

彼は我々に答えた。2 か月くらい前、継父シャバンの乳牛の番をしながら、フォルジュの風車の近くソルドル川付近にいたときに、正午を少し回った頃だったが、彼のところに件のエティエンヌ・ジロがやって来た。彼は麻を水に浸しに来ていた。件のエティエンヌ・ジロが不意に左耳をつかんだため、たいそう痛みを感じた。それから手を顔に回し、前髪をひっつかんできた。帽子が地面に落ちた。ひどく驚いた少年は、「なぜこんなことをするのだ」と彼に言った。

【10】件のエティエンヌ・ジロは彼に、「もっと他のこともするぞ、お馬鹿さん」と言った。彼は少年に「継父は母とよく寝ているのか、お前はもう母親のお気に入りでないから、もう一緒には寝ていないな」と言ってきた。そして当該の話の後、件のエティエンヌ・ジロは麻を水につけに行こうとしたが、彼の方に振り向き、彼の帽子をとって地面に投げつけ、「お別れを言ってなかったな。じきにお前は自分の周りに一匹の生き物を見るぞ」と言った。

【11】この当該の話の後、ベルナールは家へ向かった。ほんの少し離れたところで、足元に話しかけてくる小さな黒い足も毛もない生き物がおり、彼のそばで地面をはっているのに気づいた。自分の木靴を我々に示しながら、その生き物はこれと同じくらいの大きさだったと言った。その生き物は、彼の周りを何周かしながら、「神のことが好きか、自分に身を捧げ、神を棄てなければならない。送ったのは親戚のエティエンヌ・ジロであり、その証拠は彼が耳を強く引っ張ったことだ」と言った。それらの言葉に、彼は「おまえが誰なのか知らない。神を棄てたくはない」と答えた。

【12】その時、ひどく驚いていたが、それでも件の生き物は「怖がらなくて

いい。私に身を任せればよいのだ」と言った。「裕福にしてやる。ほしいだけ金をやる。何でも願いをかなえてやる。ただし、神を棄てなければならない」とも言った。これらの約束により、彼はそれ〔生き物〕に自らを与えた。「なぜなら、たくさんの富を約束してくれたので神を棄てた」と彼は言った。

【13】すると、件の生き物は少年の上着からポケットへと飛び跳ねた。そこには洋梨があった。「自分のおやつだからあげくないが、この洋梨をやる」と彼に言った。そのとき件の生き物は件の洋梨をくちばしでとらえて地面に落とし、話している彼にそれをそばの川の水の中で押しつぶすように命じた。彼はそのようにした。件の洋梨は水中で３、４度大きな音を立てて泡立ち、そして同時にどうなったか彼は知らない。

【14】すると、件のエティエンヌ・ジロが目印を付けておいた左耳からその生き物は彼の体の中に入っていった。この時から震えが始まり、悪魔に取り憑かれたと感じ、すっかりたけり狂ったようになった。取り憑かれて８日ほどすると、〔悪魔は〕少年に「サバトに行かなければならない」と言った。

【15】夜更けに、継父と他の家族の寝入り端、件の悪霊は少年を家外に移動させた。件の子供は我々に言った。出発する前に彼が件の家にいた者たちすべてをぐっすり眠らせて目をふさいだので、彼らは彼〔ベルナール〕の帰宅まで目覚めることはできなかった。件の家の外に出て、件の家から４分の１リュー〔約１ｋｍ〕あるいはもう少し離れた、カトルピィーユのクルミと呼ばれているクルミのところまで１人で行った。その場所で彼は件のデ・ベルティーユに出くわし、彼につかまれてそこから黒い生き物に２人一緒に運ばれ連れて行かれた。それは彼らをカロワ・ド・マルルという四つ辻まで運び、そこで彼らを降ろした。

【16】そこはひどく明るかった。黒いたくさんの火についたろうそくに照らされていたからだ。各人がろうそくを１本ずつ持ち、それらの１つの手から１本渡されたように彼には思われた。同様に、顔は背けられていたように思われた。「サバトに行ったら、逆さまにやるのさ」と我々に言った。そしてサバトにいた人々はそれぞれ脇の下におぞましい獣の口をもっており、その件の口によって互いにつながり、彼らの前に大きな黒い馬の姿をして現れた彼らの主人である悪魔を崇拝しに行った。〔悪魔は〕彼らに尻を差し出し、それに彼らはそれ

ぞれ接吻し、彼らの主人の腰の方にろうそくを置いた。

【17】～【22】の概略。それがなされると、シュヴォと呼ばれる彼らの主人である悪魔は、参加者たちにしるしをつけた。ベルナールは左手につけられており、それをバイイらに見せた。しるしをつけられた後、神を棄てる誓約をし、皆で食事して踊った。長時間踊った後、自分以外のすべての者たちが、１人の老婆にとび飛びかかった。サバトにいた人たちを知っているかと問われ、「たくさんの人々がいたが、デ・ベルティーユとエティエンヌ・ジロしか知らない。それと猫背の小男がいた」と少年は答えた。少年はその後２、３度同じ四つ辻でのサバトにデ・ベルティーユに連れて行かれた。

1582 年 12 月 22 日、ベルナールの継父シャルル・シャバンの証言。

【25】～【38】の概略。ブドウの収穫の頃からベルナールの様子がおかしくなった。それ以前はまったく正気で、何の精神的混乱も見て取れなかった。ブドウの収穫の頃から、少年は攻撃的になり、絶えず神の名を冒涜するようになった。少年の母親は彼に注意を払うようになり、より近くで見守っていた。少年は激怒し、「カロワ・ド・マルルのサバトに行かせてくれないなら、殺してやる。そこで悪魔が待っているから、エティエンヌ・ジロとデ・ベルティーユ、そして背むしの小男と一緒に行きたい」などと言った。継父は少年がこのように激しく苦しむのを見て、悪魔に取り憑かれているのではないかと思うようになった。彼が悪魔に会いに行きたいと言って暴れるので、鎖でつないでおいた。このような状態が続いたので、近所の人や友人に交代で見張ってもらった。

この間最初の激怒が止むことはなく、常に悪霊に苦しめられていた。「行かせてくれ、悪魔の命令通り溺死したい」とベルナールは言った。神について語り、祈るように言うと、「神を棄て悪魔に身を捧げたのだ」と答えた。発作が止んだときに、あのように苦しむ原因を聞いたところ、自分の体に悪魔を送り込んだのは、エティエンヌ・ジロであり、それを命じ援助したのがデ・ベルティーユだと言った。

このような苦しみが続いたため、証人〔シャバン〕はサン・ジェームズの司祭でサンセールの司教代理であるギヨーム･テュルパンのところへ連れていき、彼に取り憑いている悪魔を追い払ってもらえと助言された。3 度目までは悪魔

は何も答えることはなかった。少年が暴れるのを 4 人がかりで押さえつけた。宗教行列のある日にベルナールを連れてくるように司祭に言われた。その日、司祭は敬虔な祈りを捧げた後、少年を苦しめている悪魔に対して祈祷を行い、神の名の下に出ていくよう命じた。強く甲高い声が少年の体の中からした。その子が通常発する音ではなかった。「私を送り込んだ者が出ていかせるのでなければ、私は出ていかない」とその声は言った。テュルパンは祈祷を続けた。誰がこの体の中に送り込んだのかと尋ねると、デ・ベルティーユの命令でエティエンヌ・ジロがやったのだと少年は答えた。

サン・ジェームズの司祭テュルパンは夜通し祈祷を続けたが、悪魔が出ていくことはなかった。彼は悪霊たちがエティエンヌ・ジロの意志によらずには出ていかないと考え、役士であるヴァンサン・クルウェとともにジロを探しに行き、先の日曜の晩に少年がいるサン・ジェームズに彼を連れてきた。彼が入って来るや否や、悪霊どもは少年をひどく苦しめた。体の中から複数の声で、「デ・ベルティーユの命令でこの体に入れたのは彼だ」と言うのが聞こえた。7、8 人がかりで全力で押さえつけていたが、少年はエティエンヌ・ジロに飛びつき、顔をひっかいた。

少年はジロの顔に激怒して手をあげ、数々の恐ろしい声が少年の体の中から聞こえた。そのうちの 1 つが次のように言った。「ああ、悪い奴め。お前が我々をここに送り込んだのだ。」人々はこれに非常に恐れおののき、エティエンヌ・ジロに送り込んだ悪霊たちを追い出してやれと言った。

ジロは悪霊たちと話はじめ、彼らに対して「神の名の下に出ていけ」と言った。すると、先ほどよりもっと大きな反響があり、甲高く鋭い声は彼に次のように言った。「悪い奴め、誰の名の下に話すだって。お前が属しているのはそっちじゃない。話すべき仕方で話せ。お前がよく知っている我々の名前で呼べ。何を馬鹿なことを言っているのだ。我々をここに送り込んだのはお前じゃないか。話すべきように話さずとも、お前の首をへし折ったりはしないがね。」これらの声のあと、ジロは彼の言葉で言った。「悪魔よ、神の名の下にお前の名を名乗るよう命ずる。」その時、苦悶は止み、声が聞こえた。「おまえには何も言うつもりはない。だって、お前はそれを俺と同じくよく知っているのだから。」その後、彼は悪魔の名とその力の下に命じ、声は自分の名がクリだと名乗った。

そう発された後、エティエンヌ・ジロは、祈祷した。「クリよ、悪魔の名の下に命ずる。ベルナール・ジロの体から出ていきそこに戻るな、自分を選べ」と。

エティエンヌ・ジロの悪魔の名の下での祈祷は、夜の 9 時から 2 時まで続いた。悪魔たちのほとんどが名乗った後、ある者たちは恐ろしくおぞましい叫び声をあげ、ある者たちは苦しみながら、別のある者たちはコルヌミューズ〔バッグパイプの一種〕のような音、別のある者たちはカエルやヒキガエルやその他無数の様々な動物の声をまねて出ていった。それらの声は子供の体の中から聞こえた。彼はあくびをしたあと、少しのあいだ気を失ったかのようだった。

悪霊たちが言い表した名前のいくつかは、その場にいた人々によって書かれた。件の子供が苦しむのが止まないと訴え、そこにいた人々の何人かが、「かわいそうな子をこのように激しい苦痛を与え惨めに痛めつけるとは下劣な奴だ」とエティエンヌ・ジロに向かって言った。彼は彼らに、「自分はそれら［悪霊たち］を追い出すためにできるだけのことはした。自分のものはそこにもういない。他のものたちはデ・ベルティーユが送り込んだに違いない。もっともよい方法は子供をサンスに連れて帰り、件のデ・ベルティーユが残りのものを出ていかせ、同時にできることをすれば、その結果もはやそこにとどまることはないだろう」と言った。

翌日タブルデ（デ・ベルティーユ）が子供の前に連れてこられた。エティエンヌ・ジロがやったように悪魔の名の下に祈祷した。悪魔は同じ声で同じように答えた。「この中に悪霊たちを送り込んだのはエティエンヌ・ジロだ」と。

ニコル・ジャック＝シャカンも指摘するように[24]、この裁判には妖術裁判に典型的なところとそうでないところが両方認められる。典型的なところとは、様々な妖術による悪行、かけられた呪い、悪魔との出会い、サバトへの参加などがでてくるところである。特に、バイイは執拗にサバトに関する質問をくりかえしている。同時に、妖術師である証拠となる悪魔によって体につけられたしるしについても入念に調べている。また、村の中での「うわさ」や日常の反目や怨恨の表出がみられるのもこの種の裁判にはつきものだ。典型的でないところは、悪魔憑きが結びついているという点である。悪魔憑きの少年ベルナール・ジロは、一連の裁判のきっかけとなり、終始その中心人物であり続けた。

彼は神を棄て悪魔に身を捧げることを誓いサバトに行った。普通ならこれは妖術師として断罪されるために十分な行為である。しかし、彼は常に妖術師に悪魔憑きにされた被害者としてのみ姿を現す。身体的に異常な状態に陥り、苦しむ彼は「人々」にとっては犠牲者でしかなかった。その彼が自分に悪霊を送り込んだ妖術師として告発したのは、彼をからかってきたいとこのエティエンヌ・ジロとかねてより村人たちから素行が悪いと目をつけられ、妖術師だとのうわさもあったタブルデだった。

2.2 悪魔の言うことは信じられるか

カロワ・ド・マルルの妖術師裁判は、ベルナールが悪魔憑きの状態でエティエンヌ・ジロとタブルデが悪魔を自分に送り込んだと告発したことにより大きな展開を見せた。少年に取り憑いた悪魔の言うことがバイイをはじめとする裁判を進めた役人たちと村の人々によって真実だと受け入れられたためである[25]。ところで、「虚言の父」と称されることもある悪魔の言うことは信じられるのだろうか。この問いへの答えは消して簡単なものでもなければ明白なものではないと D. P. ウォーカーは述べている[26]。キリストは「悪魔は最初から人殺しであって、真理をよりどころとしていない。彼のうちには真理はないからだ。悪魔が偽りを言うときは、その本性から言っている。自分が偽り者であり、その父だからである」と発言している（「ヨハネによる福音書」8:44）。だが、聖書において悪魔憑きの口から悪霊が真実を語る場面もままある。例えば、安息日に会堂に入って教えていたイエスに向かって、汚れた霊に取り憑かれている男は「ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ」（「マルコによる福音書」1:24）と述べ、フィリピでパウロが出会った占いの霊に取り憑かれている女は「この人たちは、いと高き神の僕で、皆さんに救いの道を宣べ伝えているのです」（「使徒行伝」16:17）と言っている。また悪霊たちは「神は唯一だということも信じておののいている」（「ヤコブの手紙」2:19）とされた。

ボダンは、悪魔と親しみ、ふざけたり、質問したりすることをよく思っていなかった。ドイツでサタンの言葉を信用し、その命令に従って処刑が行われた

のは、忌まわしく劫罰に値する神への冒涜行為だと述べている[27]。ボダンは、その事件に関して具体的に述べてはいないのであるが。

ドミニコ会の神学者セバスチャン・ミカエリス（1543－1618）は、悪魔は常に嘘つきであり、人間に損害をもたらそうとしていると述べたあとで、悪魔祓いで神の名の下に強制され命令された場合、話は別だとする[28]。ゲラサの人に取り憑いていた悪霊たちがイエスに懇願し、その人から離れ豚に乗り移らせてもらったという話（「マルコによる福音書」5:6-13）を取り上げ、ミカエリスはここに注目すべき 2 つのことがらがあると言う。1 つめは、悪魔によってであれ、神の名の下での懇願がイエスによってかなえられているということである。2 つめは、イエスの問いに対して悪魔が真実を答えていることである。つまり、彼らは自発的にではなく、彼らに強制することができる者たちに強いられることによって真実を言う。悪魔に強制することができる者たちというのは、イエス・キリストとこの力を与えられた彼の代理人たちに他ならない。

悪魔祓いの際に、神の名による命令をする司祭たちにもこの力があると考えられた。カトリックの悪魔祓いの手引書において、司祭たちは悪魔に対し、自分の名前、仲間はいるか、いつ体内に入ったのか、何のためにか、いつ体から出ていくつもりか、出ていく合図は何かなどを尋ねるよう命じられていた。しかし、『ローマ定式書』（1614）などは司祭に対して不必要で興味本位な質問はしないように、悪魔に自発的に語りことを許さないようにと忠告している。悪魔は公然と説教をしたり話したりすることを熱望している。そうすることによって、聞いている者たちの心に、破滅へと導く多くの毒をまき散らすことができるからだ[29]。

17 世紀最大の神秘神学者の 1 人であるジャン＝ジョゼフ・シュラン（1600－1665）も、悪魔が常に嘘を言うわけではないと考えていた。「悪魔がいつ真実を言い、いつ言わないかを知ることの、確実で疑いない方法を示すことは困難である。ただ、神がそれに関しお与えくださった体験によれば、悪魔祓い師がよく職責を果たし、利害なく慎重な心でことに当たれば、主は悪魔をして＜教会＞が望むことをさせるものであり、多くの場合神は、魂の善のため、悪魔をして――悪魔がもっともそう望まないときに――とても大きな真実を言わせるものだとは、言うことができる。そして、悪魔が言うことが、信仰が我々に教え

ることと合致していれば、我々は大きな安心を持つことができる……[30]。」

だが、実際の悪魔祓いの場面においては、悪魔が発した言葉に手引書や新約聖書により正当化される以上の信用がおかれていたと考えられる[31]。カロワ・ド・マルルの裁判に立ち会ったバイイも、警戒しつつも悪魔からもたらされる情報を利用した。バイイは、「嘘つきでペテン師である悪魔は神の被造物（妖術師の告発を受けた者たち）にいかなる影響力ももたない」[32]と発言し、対話者の相手である悪魔の主張に疑いをもってもいた。だが、「彼女（ギユメット・ピロン）は俺のものだ。彼女にしるしを付けた」、ピロンの自殺後にくりかえされた「彼女の魂は俺のものだ」といった発言は裁判官にとって重要な証言であった。そして、悪魔につけられたとされるしるしが体に見つかったとき、特に悪魔の言うことに信用が置かれた。悪魔の言うことに全幅の信頼はおかれていないものの、悪魔祓いにおいて悪魔からもたらされた証言は被告の罪を問うための強力な証拠となったと考えられる。

2.3　妖術師が呪いを解くことについて

エティエンヌ・ジロとタブルデは、ベルナール・ジロの告発によって彼に悪霊たち送り込んだと見なされ、それらを追い払いように求められて実行した。同様の事例はこの裁判記録の中にたびたび出てくる。ここでは一例のみ取り上げておく。

1597 年 12 月 26 日（土）、30 歳くらいの粉屋であるロンブル・リモザンは、仲間たちとサンセールの市場に行った帰りにマラン・スムレと出会った。リモザンはスムレに左肩をたたかれたあと、四肢に震えが走り歩けなくなってしまった。リモザンはスムレが妖術師であるとのうわさを耳にしていたため、この病気が彼によってもたらされたのではないかと考えた。そして、その晩に弟であるフランソワ・リモザンをスムレの家に行かせ、病気を取り除いてくれなければ領主に訴えると伝えさせた。しばしの後、フランソワはスムレを連れて戻った。スムレは、「呪いは自分でなければ解くことはできない」と言った。スムレはフランソワに、夕食をとれば元気になると言った。スムレがワインに浸したパンを食べさせるとフランソワの具合は良くなり翌朝には治った。そのパンくずを食べたガチョウは死んだ[33]。

呪いをかけた張本人にそれを解かせることが民衆世界において広く行われていたであろうことは、悪魔学者たちの記述の中からもうかがい知ることができる。ボダンは、この問題は神学者、教会法学者、法律家のあいだでも解決を見ていない難しい問題だとする。法律家たちは、迷信的方法によって呪いを追い払うことができると考え、教会法学者やスコトゥス（*Super Sent*., lib.4. d. 34）をはじめ神学者たちの中にも同意見の者がいるが、他の多くの健全な神学者たちは､呪いを妨げ追い払うために悪魔と妖術師の助けを使うのは偶像崇拝であり、背教であると見なしているとボダンは言う[34]。トマス・アクィナス、ボナヴェントゥラ、デュラン（1275－1334、フランスの神学者、ドミニコ会士）らも同意見であるとされ、呪いを妖術師の手によって取り除くにしても、まったく妖術師ではないが迷信的方法によって他の者に移して呪いを取り除くにしても、明白にあるいは黙って悪魔に祈願する者は死の苦しみを味わうべきだとされている。

悪魔たちが妖術師たちの要求によって出ていくことがしばしばあることをボダンは認めている。その場合、悪魔は神のように崇められるために妖術師に従っているとされる。悪霊を追い立てて去らせるものは創造主への賛辞であり、被造物へのそれではない｡妖術師たちが悪霊たちを追い払うように見えるとき、これは追い払っているのでも出ていくよう強制しているのでもなく合意の上なのであり、迷信や偶像を用いて悪霊が強制されて出ていったように見えることがあるが、これも無知な者たちに彼らの偶像崇拝をし続けさせるための悪魔の策略だとボダンは考えていた。「体を治しても魂は殺してしまうこのような忌まわしい治療を試みるくらいなら、死んだほうがどんなにかましである」[35]と彼は言う。

ボダンと対照的なのがニコラ・レミ（1530 頃—1612）である。レミは『悪魔崇拝』において、魔女たちに迅速に呪いを解かせるためには、脅しや暴力に訴える以外に効果的なものはないと述べている。とはいえ、強制して魔女に治療させることは、このような治療に必然的に魔女が関わっているという事実だけで罪を免れているとは言いがたく、冒涜の香りがするともレミは認めている。しかし、神の激怒を招く行為である悪魔との契約とは無関係であり、いかなる悪しき意図や冒涜の意識に駆り立てられて治療をさせるわけではないため、神

の法によっても世俗の法によっても有罪ではないとした[36]。

ボゲは魔女たちが治療するとき、病を治しているのはサタンであり、その治療は一時的なものであり、治すためには他の人間や動物に病が移される必要があると言う。魔女たちの治療は不確かであり、なされたとしても厳密には治療とは呼べないため、彼女らに相談しないのが最善だと結論する。

ピエール・ド・ランクル（1553－1661）もボダンやボゲと同意見であり、どんな目的のためであれ魔術を使うべきではないと考えた。魔女のもとを訪れる以外に他の治療法がない場合であっても、結果的に体より大切な魂、さらには神の名誉を損なうことになるため、そうすべきでないとした。そして、最も良い解決法は、知らない人のもとを訪れて助けを頼まないことだとする。なぜならば、その人物が何らかの新しい呪いやサタンの援護を用いてのみ病気を取り除く可能性があるからだ。病気をもたらした張本人に治療を任せてもならない。というのも、「その者はいかなる合法的な手段によって治すことができない上に、その者自身ある種の非合法的で断罪されるべき方法を用いずに治すことはできないからだ」[37]と彼は述べる。

ヴァイアーは、魔女たちが彼女らの妖術のせいで苦しみを受けている者たちのために神の加護を祈って治療していることを馬鹿げたものだと結論している。「もし、彼らを治すのが悪霊と付き合い契約を結び、その助けを借りて（大衆が考えているように）ある者たちをいろいろな苦しみでさまざまに責め苛んだ魔女なら、自らの意志により以前に結んだのと同じサタンによる方法で、同じ者たちを解放することになる。だが、考えられているように、彼女は契約を結び義務を負っているので、サタンに仕え、隷属している。だから、彼女は何もできない、特に神への言葉の力によっては何もすることができないとより確実に考えられる。それらが口先だけで唱えられても、もはや大した効力はないことにはまったく疑いがない。（それらに何らかの力があるとしたら）それらが自らの意志ですべての神との親交を断ち、敵として不断の戦いを明言している魔女たちによってではなく、教会の忠実な聖職者や真の宗教に献身的な者たちによって発されるときだ[38]。」

ヴァイアーがここで最後に述べている聖職者による悪魔魔払いは、常に効果

があるというわけではなかった。ベルナール・ジロに対してもサンスの司祭とサン・ジェームズの司祭が悪魔祓いを試みたが、少年が悪魔から解放されることはなかった。そこで妖術の被疑者たちによる悪魔への祈願が行われたのである。つまり、妖術を妖術で追い払おうとしたわけである。このような行為は、1398 年 9 月に出されたパリ大学神学部による魔術を糾弾する条項の中で禁止されていた。このパリ大学神学部の決定をボダンは『妖術師の悪魔的狂気』の序文のあとに全文掲載している。その第６条で「妖術を妖術によって追い払うことは合法とされる、さらには許されるべきだとすること。これは誤りである」と述べられている。このように断罪されていても、悪魔の力を借りて妖術を解こうとする行為が民衆世界で途絶えることがなかったことは、悪魔学の記述に加えて、今回のカロワ・ド・マルルの裁判の記録からも明らかである。裁判記録に関して興味深いのは、民衆よりは上よりは知的レベルの高いバイイらがこのような行為を認めていた点である。彼らは悪魔学者たちと民衆の中間に位置する人々であり、悪魔学の知識を持ち合わせていたことは、その質問内容から容易にうかがい知れる。彼らは悪魔学の中でこのような行為が断罪されていることを読んで知っていたであろう。しかし、呪いをかけた者が解くことができるという伝統的な心性を民衆たちと共有していたからこそ、悪魔の名による祈願を許していたのではないかと考えられる。

おわりに

悪霊およびそれと結びついて私利私欲を満たす人間がいるという信仰は、魔女狩りが起きた時代よりはるかに昔から存在し、おそらく現在においても存続しこの先も完全に消えることはないように思われる。隣人から恐怖心を抱かれたり胡散臭がられたりする者もどこの村や町にもいたであろう。だが、普段はそれが大きな問題を引き起こすにはいたらない。下水が決まった場所を静かに流れているようなものである。ところが、大雨で突如下水が氾濫するように、常日頃からの恨みや妬みのような、村人たちあいだに遍在していたどす黒い蠢きの噴出があることをきっかけに起こることがある。カロワ・ド・マルルの裁判はその一例である。

悪魔憑きが当時どの程度頻繁に見られたかの判断は難しいが、悪魔学者たちの証言からは、彼らにとっては身近な現象であったことがわかる。それは信じがたい超自然的な現象ではあるものの、悪魔学の中では現実のものとしてとらえられていた。ベルナールの憑依を目の当たりにして妖術師への裁きを求めた村の人々や、そこに赴いたバイイたちもベルナールが悪魔に取り憑かれていると信じていた。その大きな背景として、悪魔の力が増大しこの世界が終わりに向かっているという恐怖の気配があったことは繰り返すまでもないであろう。そのような気運の中で、子供の悪魔憑きの言ったことを大人たちが信じ、それをもとに大がかりな訴訟が展開したという点が注目される。

子供の口から発せられる悪魔の言葉を大人たちが信じるには、それなりの理由があったからに違いない。狂乱状態に陥りわめき散らすという症状は狂人にも見られるが、村人たちはベルナールを単なる狂人とは見なさなかった。悪魔憑き状態のベルナールが自分に悪魔を送り込んだとして告発した男たちに彼らは処罰を願ったが、これは単に悪魔の言うことを真実だと鵜呑みにしたからではなく、そのことが自分たちの利害、あるいは欲求と一致してもいたからだと考えられる。ことによっては、記録に残らないところで村人たちがベルナールに自分たちの希望の犯人の名前を言うように誘導していた可能性もある。バイイにしても、悪魔憑きの少年の言葉のみで動いたわけではない。訴訟記録からは、広く証言者を集めて、被告と証人を同席させた尋問が丁寧に行われていたことがわかる。裁判を進めるにあたっては、記録の中に見え隠れする村人たちの言動が多く影響していたはずである。バイイと村人たちおよびベルナールとのある種の共犯関係が成り立ったからこそ、6 人の妖術師が処罰されるという事態を招いたのであった。

---

[1] ミュリエル・ラアリー『中世の狂気』浜中淑彦監訳，人文書院，2010 年，p. 39.
[2] Brian P. Levack, *The Devil Within*, 2013, p. 33.
[3] *Ibid*., p. 20.
[4] フランスで悪魔憑きの女たちが同時に魔女でもあったという事例がいくつかあるが，これは特異なケースである. D. P. Walker, *Unclean Spirits*, 1981, p. 10.
[5] Henry Institoris et Jacques Sprenger, *Le marteau des sorcières*, Amand Danet (éd., et trad. par), Grenoble, 1990, rééd. de l'édition de 1973 (*Malleus Maleficarum*, 1486), p. 327 .『鉄鎚』テクストには仏訳を用いたが，英訳も参考にした. *The Malleus Maleficarum of Heinrich*

Kramer and James Sprenger, Montague Summers (trans.), New York, 1971 (reprint of 1928 ed.).
[6] Henry Institoris et Jacques Sprenger, *op. cit.*, pp. 328-329.
[7] *Ibid*., p. 331.
[8] *Ibid*., p. 332.
[9] *Ibid*., p. 333.
[10] *Ibid*., p. 329.
[11] *Ibid*., pp. 334-335.
[12] Jean Bodin, *De la démonomanie des sorciers,* Paris, Jacques du Puys, 1580(réédition de 1587), Paris, Gutenberg Reprints,1979, p. 154L.
[13] *Ibid*., p. 354R.
[14] *Ibid*., p. 355L.
[15] Henri Boguet, *An Examen of Witches*, translated by E.Allen Ashwin, edited by Montague Summers, London,John Rodker,1929, p. 8.
[16] *Ibid*., pp. 1-3.
[17] *Ibid*., p. 10.
[18] Johann Weyer（Jean Wier）, *Histoire, disputes et discours des illusions et impostures des diables, des magiciens infames, sorcieres et empoisonneurs : Des ensorcelez et demoniaques et de la guerison d'iceux: item de la punition que meritent les magiciens, les magiciens, les empoisonneurs et les sorciers* (Le tout compris en six livres), 2 vols., New York, 1976 (réimpression de l'édition de 1579), vol. 2, p. 487.
[19] *Ibid*., pp. 501-502.
[20] *Ibid*, p. 504.
[21] 以下の書に収録された裁判記録を史料として用いた. Nicole Jaques-Chaquin et Maxime Préaud (text établi par), *Les sorciers du carroi de Marlou*, 1996.
[22] 以下の【】の番号は史料に付されているものである.〔〕は筆者による補い.
[23] 教皇グレゴリウス 13 世の命による改暦がフランスで導入されたのは 1582 年 12 月 20 日からである.
[24] Nicole Jaques-Chaquin et Maxime Préaud (text établi par), *op. cit*.,≪Présantation≫.
[25]告発者が幼い子供たちだった場合, 魔女の告発の「一部は子供の遊び」であったが, 悪魔憑きの周囲の雰囲気が, 明らかに魔女の告発を促したり指示したりしていた場合が多いとされるが(ダレン・オルドリッジ『幻想と理性の中世・ルネサンス』池上俊一監修, 柏書房, 2007 年, p. 222), ベルナールの場合も後者のケースであろう.
[26] D. P. Walker, *op. cit.*, 1981, p. 7.
[27] Jean Bodin, *op. cit*., p. 163R.
[28] Sébatian Micaëlis, *L'Histoire admirable de la possession et conversion d'une pénitente Séduite par un Magicien, la faisant sorcière et Princesse des sorciers au Païs de Provence, conduite à la Sainte baume pour y estre exorcisée l'an M. DC. X au mois de Novembre, soubs l'authorité du R. P. F. Sebastien MICHAELIS, Prieur du convent royal de la Sainte Magdeleine à S. Maximin, et dudict lieu de la Sainte baume, Commis par luy aux exorcismes et recueil des Actes le R. P. F. François DOMPTIUS Docteur en théologie en l'Université de Louvain, Flamant de nation, residant au susdit convent de S. Maximin, soubs la Discipline reguliere et Reformation de l'Ordre des freres Prescheurs : le tout fidelement resueilly et tres bien verifié, Ensemble la Pneumalogie, ou Discours des Esprits du susdit P. MICHAELIS, reveu et corrigé, en cette troisiesme edition augmentée par le mesme, avec une apologie explicative des prinsipales difficultez de l'Histoire et Annotations,* Paris, C. Chastellain, 1614(La première édition date de 1611), ≪Au Lecteur≫.
[29] Sarah Ferber, *Demonic Possession and Exorcism*, 2004, p. 19.
[30] ミシェル・ド・セルトー『ルーダンの憑依』矢橋透訳, みすず書房, 2008 年, p. 239.
[31] D. P. Walker, *op. cit*., p. 8.
[32] Nicole Jaques-Chaquin et Maxime Préaud (text établi par), *op. cit*, p. 119.
[33] *Ibid*., p. 128.

[34] Jean Bodin, *op. cit*., pp. 144R-145L.
[35] *Ibid*., p. 150L.
[36] Nicolas Rémy, *Demonolatry*, Montague Summers (éd., présenté et annoté par), E.Allen Ashwin (trad. par), London, 1930, New York, 2008 (réimpression), (trad. anglaise de *Daemonolatreiae Libri Tres*, Lyon,1595), p. 154.
[37] Pierre de Lancre, *Tableau de l'inconstance des mauvais anges et demons où il est amplement traité des sorciers et de la sorciellerie*, introduction critique et notes de N. J-Chaquin, Paris, Aubier, coll.《Palimseste》, p. 247.
[38] John Weyer, *op. cit*., p. 507.